

令和 3 年 6 月 7 日現在

機関番号：11501

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2020

課題番号：18K00007

研究課題名（和文）現象学における想像と画像意識の追究 フッサールを起点として

研究課題名（英文）The inquiry about phantasy and image consciousness in the phenomenological thoughts --- from Husserl's thought

研究代表者

小熊 正久（OGUMA, Masahisa）

山形大学・人文社会科学部・名誉教授

研究者番号：30133911

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の課題は、フッサール以来の現象学における想像と画像意識の諸研究の意義を解明することであった。代表者は、最初に、志向性を枠組みとした「想像」と「画像意識」のフッサールの考えを、画像意識の三契機（像物体、像客体、像主題）と中立性変様の思想を中心に提示した。第二に、「中立性変様」の思想を受け継いで構想されたフィンクの演劇論とインガルデンの「文学的芸術作品」論 言語論、擬似判断の思想を含む を考察した。第3にメルロ＝ポンティのソシュールの影響下での言語論と意味論、そして、ゲシュタルト心理学などを参照した知覚論と絵画論を考察した。以上の現象学者による表現媒体の扱いの意義を評価することができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

インターネット社会に象徴されているように、現代人と生活世界は多くの表象・表現媒体によって規定されている。知識や意見交換、芸術・スポーツなどでのプレゼンテーションがその例である。そこで現代社会と人間を根本的に検討するためには、表象・表現媒体の考察が不可欠である。

古来人間の把握は、精神と身体、知性と感性という枠組みに従っていたが、上の状況を考えれば、より柔軟で、身体と感性を中心に据える考察が必要となっている。その際、世界内存在としての人間、表現媒体としての言語と画像が再考されなければならない。現象学者たちの表現媒体に関する考察はそうした基礎論となりうるものである。本研究の成果はそのことを示す。

研究成果の概要（英文）：The purpose of my project was to examine the significance of the phenomenological investigations on mental acts of Phantasie and image consciousness, by following the works of phenomenologists. The research results are as follows. Firstly I clarified Husserl's analysis of Phantasie and imaginary consciousness and explained his concept of neutral modification. Secondly, I interpreted Eugen Fink's treatment of theater and action using the concept of neutrality. Thirdly I clarified Roman Ingarden's theory on the literary works of arts employing the concept of neutrality. And Fourthly, I revealed the significance of Merleau-Ponty's analysis of human expressions (language and painting) and their meanings from the phenomenological viewpoint.

These results show that these phenomenological investigations have significance to clarify the structure of human representation-media.

研究分野：哲学

キーワード：画像 想像 現象学 フッサール メルロ＝ポンティ 表現媒体 オイゲン・フィンク ロマン・インガルデン

1. 研究開始当初の背景

フッサールは、対象へ向かう意識の特質である志向性を基本概念として、想像、画像意識についてかなりの期間にわたって分析を続けたが、その記録は、*Husserliana Bd.23, Phanatasie, Bildbewusstsein, Erinnerung* に収められている。この内容は、志向性の典型である「記号的ないし思念的志向」、「想像的志向」、「知覚的志向」をもとに「画像意識 *Bildbewusstsein*」の解明を目指すとともに、『イデー第一巻』以降は、「中立性変様」、「知覚的想像」といった概念を画像のみならず演劇、物語などにも適用するといった注目すべきものであった。

研究代表者は、本研究開始時には、上記書物にもとづくフッサールの想像、画像意識についての思想の解読はほぼ終了していたが、その全体像の把握を完成し論文として発表するにはいたっていなかった。また、フッサールの思想のその後の現象学者への継承関係も研究中であった。

2. 研究の目的

太古より、「画像」は人間にとって、「言語」と並ぶ重要な表象・表現媒体であり、インターネットによる情報や画像のやりとりに象徴されるように、その重要性は現代においてとくに増大しつつある。しかし、画像表現の在り方や意味および理解の仕方、想像作用と画像の関連、画像表現と言語表現の差異と関連などは、未だに十分に解明されているとは言いがたい。だがこの解明は人間存在の理解とともに現代社会に生きる人間の有り様を理解するために不可欠であろう。

ところで、フッサールをはじめとする現象学者の想像論、画像論をみると、知覚、想像、画像意識のはたらきを言語的な表象・表現とは別種の対象への関係(志向性)として扱い、画像が、一面ではそれ自身が物として知覚される存在者でありながら、他方では、それ自身はいわば透明になりながら、対象を表現する機能をはたすということ(つまり「像」の機能)の解明を行おうとしている。この点の解明なしには、言語と画像の機能(表現法と理解の仕方)の差異と関連も捉えることはできない。

フッサールは以上の問題意識から、1 で述べたように、「画像意識」などの研究をおこなったが、その課題は、その後の現象学者たちにも受け継がれており、それぞれ独自の観点から研究を進めた。とくにメルロ＝ポンティはフッサール現象学を受け継ぎながら、ソシユール言語学やゲシュタルト心理学を含む広範な学問的潮流をふまえ、言語表現と画像(絵画)表現の意味を解明しようとしていた。

以上の考えから、フッサールの想像や画像に関する思想を全体として総括すること、また、どのような点がフッサールからその他の現象学者に受け継がれ、上の問題の解明にとって有意義であるかを明らかにするのが本研究の目的であった。

3. 研究の方法

第1に、研究代表者が個人として、フッサールをはじめ現象学および美学関連の文献の読解を通して研究を進め、成果を学会発表や論文として発表することを試みた。

第2に、「想像と画像についての研究会」を開催し、それを上の問題に関心をもつ研究者との発表会、意見交換会とした。なお、この研究会は2018年度、2019年度はそれぞれ1回

開催したが、2020年度はコロナ禍のため開催できなかった。

4. 研究成果

研究成果は年度毎に分けて叙述する。

2018年度は、第一に、論文「フッサールの想像と画像意識の現象学的分析」を発表し、この主題に関するフッサールの分析の全体をまとめたことがあげられる。内容は以下の通りである。1)対象に向かう志向性という特徴をもつ志向作用全般とその分析の独自性を概観した。2)1904/05年の講義「想像と像意識」における「想像作用」と「画像意識」についての考えを検討し、「画像」がほかのもの「像」すなわち「媒体」として捉えられることはどういうことかという、「像」一般についてのフッサールの基本的な立場を説明した。そこでは、「像物体」・「像客体」・「像主題」の連関が問題となる。3)『イデー第一巻』に至るまでのそれらの考察をまとめたが、そのさい、「想像」と「画像意識」のいずれにも関わるものとして「中立性」の概念が重要事項となる。4)知覚的内容の表象であるが、現実存在の措定を含まないという点で中立的である「覚知的想像」(ないし「知覚的想像」という態度に注目し、それが「風景の美的観照」、「演劇の鑑賞」、「物語の聴取」、画像意識における「像客体」の在り方に含まれる契機であることを考察した。この態度は、絵画のみならず、芸術鑑賞全般に関わる重要な態度と考えることができる。

第二に、「想像と画像についての研究会」(12/22、東北大学)を開催し、口頭発表「フッサールにおける想起とその時間的構成 大森時間論との対比を出発点として」を行い、ほかの参加者と意見交換をおこなった。発表では、想像や画像意識とも関連する「フッサールの時間論」の基本構造を明らかにし、また大森荘蔵氏の時間論との対比を通して、その独自性を明確化した。

2019年度には著書『メルロ＝ポンティの表現論 言語と絵画について』(東進堂)を刊行した。ソシュールは、言語記号を、シニフィアンとシニフィエの両面において「記号相互の差異と関係からなる」体系であるとし、その洞察によって、言語記号が実体的な意味を指し示すという伝統的な考えを打破した。

メルロ＝ポンティは『間接的言語と沈黙の声』においてソシュールの見方を継承しつつ、言語体系の通時的変遷やパロール(語ることによる言語活動)における創造性について考察を行った。彼はまた、絵画表現についても、『眼と精神』では、『知覚の現象学』でゲシュタルト心理学を参照しながら論究した「知覚における意味」や「身体的意味」をもとに、人間が動的活動としての知覚を基盤にして身体的存在として描画することとその意味を考察した。さらに、『間接的言語と沈黙の声』では、言語表現における意味と絵画表現の意味を平行にあるものとして考察した。その際、フッサールにみられる身体論や知覚野における諸対象の前述定的な類型的意味の把握や間主観的世界の把握がその背景にある。

拙書はこのような構想のもとで、フッサール、ソシュール、メルロ＝ポンティに依拠しながら「表現媒体」について考察した。そのさい、「意味」のあり方を考えるさいにプラトンからフッサールまで問題になってきたイデア論的思想や、古来からの知覚論(エピクロスやデカルト)、感性と悟性の媒介を「想像力(構想力)」に求めたカントの思想なども含めて考察し、メルロ＝ポンティの思想が、フッサールの現象学を継承しつつ表現媒体の考察において新局面を開いたことを示した。そのさい、現象学・解釈学の立場に立ちながら美学・芸術論の考察を行っているゴットフリート・ベームの思想を参考とした。

以下、メルロ＝ポンティのフッサールとの関連を確認しておく。フッサールのいう志向性

の構造は「主体 - ノエシス - ノエマ - 対象」で表すことができる。「志向性」の記号的表象、想像的表象、知覚的表象という分類の中にすでに表象媒体への注目は含まれていたが、後期思想において言語活動や媒体の重視がみられ、その点を考えると、ソシュールのシニフィアン・シニフィエを「ノエシス - ノエマ」の実質とみることができる。こうして、言語については、ソシュールやメルロ＝ポンティの考察を「表現」の現象学的アプローチを見ることができる。また、像意識は「ノエシス ノエマ」の一環として考察することができるが、メルロ＝ポンティの絵画論も、像意識を身体や描画という表現活動に注目しながら展開したものと考えられるのである。

2020年度は、第一に、オイゲン・フィンクの論考「再現前化と像」(1930)と『人間的現存在の根本現象』(1979)にそくして、彼のフッサールの思想を受け継いだ画像論と人間的現存在のなかに演劇ないし演技を位置づけた演劇論を検討した。とくに演劇論に関しては、「非現実性」(仮象性)と「意味理解」に焦点をしばった。「非現実性」は画像や演技を含む「像」一般が成り立つための必要条件である。像は現実のものに取り巻かれているが、それが表すのは非現実性の世界であり、像はそれをのぞく窓のようなものである。そして、そのこのことによって、行動は、動機や背景の見直しとともに新しく解釈され、行動(演技)によって反省的に呈示される。また、その「意味理解」は、概念的でなく「シンボルの現示」(S.K.ランガー)という性格を持つのである。こうして、代表者は、フィンクが、フッサールのいう像意識の一契機である「像客体」の役割を役者や舞台装置や演技にたいして適用し、それらを知覚されたものの「中立性変様」(現実存在の措定を停止するがあたかも存在する現実であるかのようにみなす変様)として扱うこととして演劇を分析したことを把握した。また現象学的方法が現代の演劇分析の有力な一手法とみなされていることを確認した。

第二に、口頭の研究発表「現象と芸術作品 フッサールとインガルデン」において、インガルデンの『文学的芸術作品』(1931)、『文学的芸術作品の認識について』(1997)を中心として彼の文学的芸術作品論を考察した。

インガルデンは、文学作品を、言語表現の音声、語や文の意味、表現される事態、象面(射映)や想像による具体化などの層構造をもつものとして分析した。また彼は、一方では作品を「不確定箇所」や「曖昧さ」をもつものとして、また他方では、「準備された象面」や「想像的象面」によるある程度の具体化がなされるものとして理解した。また、作品中の判断は現実を措定するのではない「擬似判断」であると考えた。こうして、意味や事態の「現れ」の生き生きとした有りさまと美的質を感受するためには「具体化」が必要であるとされるが、しかし、「具体化されてはいても、擬似経験という美的態度において、現実の状況の中での実在でないことを承知しているゆえに、われわれはその具体化を「平静に」受け入れ、「観照し」(S.314)、美的質や形而上学的質を感得しうるものと彼は考えたのである。

さて、ここでの「非実在性」はフッサールの言う「中立性」に対応し、現実かどうかを問題にしたり確認し実証したりする「探究的態度」を取らず、「中立的態度」の一つとしての「美的態度」をとる場合の対象の措定のされ方である。この点でインガルデンの思想は、作品分析のみならず、美的態度に関しても、フッサールの思想に符合していると言えるであろう。

こうして、2020年度は、フッサールの想像および像意識の思想と対比しながら、フィンクとインガルデンの芸術の表現媒体についての思想を扱ったが、いずれも、フッサールにおける「中立性変様」の事例としてみられる絵画、物語の分析の思想を受け継ぎつつ、独自の仕方で発展させたものとみることができる。代表者は、両者にそくして、芸術における表象

媒体と表象の在り方(中立性)、そして、そこで表現される意味の在り方(シンボリック的現示、不確定性や曖昧さ)を明らかにすることができた。代表者の見方をまとめれば、芸術の表象媒体によって可能になる「中立性」という鑑賞の在り方は、対象の現実性の措定を停止することによって現実と無関係になるのではなく、むしろ、それを通して、制作においても鑑賞においても想像力の働く場を提供する役割を果たすと考えられるが、それによって現実との関わりがなくなるわけではないのである。

2020年にはまた、木下喬訳『現象学入門 歴史的観点から』(東北大学出版会)の解説(167-181頁)を執筆した。同書はアリストテレスにははじまり、ブレンターノ、トワルドフスキー、マイノック、フレーゲを経てフッサールにいたる「志向性」の扱いを中心にフッサール現象学を解説したものであり、特に「ノエマ」概念の解説としてすぐれている。フッサール現象学の基本構造の検討のために本研究にも有益であった。

以上、現象学的画像論、想像論について研究、発表をしてきたが、フィンク、インガルデンにおいては、「志向性」と「像」についてのフッサールの分析が活かされ、芸術の表現・表象媒体の分析と芸術の新たな捉え方がなされてきた。また、メルロ＝ポンティにおいてはやはり表現・表象媒体の考察が進められ、表現の意味について新たな分析がなされるとともにそれをめぐる新たな問いも開かれた。これらの展開を見届けたことが本研究の成果であった。

なお、同時期の現象学者による関連した分析としては、サルトルの『イマジネール』が挙げられる。フッサールからの影響、メルロ＝ポンティとの関連も含めて重要な著作であるが、その研究は、今後の課題として機会をあらためて行いたい。

最後に2018、2019年度に小熊が開催した「想像と画像についての研究会」の発表者と題目を記しておく。

第1回：2018.12.22 場所：東北大学文学部 919 演習室

発表1：音喜多信博(岩手大学)「メルロ＝ポンティにおける知覚論 マクダウェルとの対比を出発点として」

発表2：小熊正久(山形大学)「フッサールにおける想起とその時間的構成 大森時間論との対比を出発点として」

第2回：2019.8.31 場所：東北大学文学部 919 演習室

発表1：小林睦(東北学院大学)「映像意識の現象学のために 身体とシネマトグラフ」

発表2：菅原潤(日本大学工学部)「『世界』へのあらがい マルクス・ガブリエルと高橋里美」

いずれも、想像や画像を中心に有益な発表と議論が行われた。

以上

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 小熊正久	4. 巻 17
2. 論文標題 演技の非現実性と意味 オイゲン・フィンクの場合	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 山形大学大学院社会文化システム研究科紀要	6. 最初と最後の頁 01-18
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 小熊正久	4. 巻 51
2. 論文標題 フッサル現象学における想像と画像意識の分析	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 思索	6. 最初と最後の頁 01-31
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 小熊正久
2. 発表標題 現象と芸術作品 フッサルとインガルデン
3. 学会等名 メルロ＝ポンティ哲学研究会（第10回、ワークショップ現象学的美学）（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 小熊正久
2. 発表標題 フッサルにおける想起とその時間 的構成 大森時間論との対比を出発点として
3. 学会等名 想像と画像についての研究会（第1回、東北大学、12月22日）
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 小熊 正久	4. 発行年 2019年
2. 出版社 東進堂	5. 総ページ数 158
3. 書名 メルロ = ボンティの表現論 言語と絵画について	

〔産業財産権〕

〔その他〕

木下喬訳『現象学入門 歴史的観点から』（東北大学出版会,2020）の解説執筆(167-181頁)。

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	音喜多 信博 (OTOKITA NOBUHIRO)	岩手大学	
研究協力者	小林 睦 (KOBAYASHI MUTUMI)	東北学院大学	
研究協力者	菅原 潤 (SUGAWARA JUN)	日本大学	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	野家 伸也 (NOE SHINYA)	東北工業大学	
研究協力者	清塚 邦彦 (KIYOZUKA KUNHIKO)	山形大学	
研究協力者	西岡 けいこ (NISHIOKA KEIKO)	香川大学	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関